『崖の上のポニョ』深層分析

瓢六玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『崖の上のポニョ』深層分析

【Ｎコード】
Ｎ８０６３Ｆ

【作者名】
瓢六玉

【あらすじ】
宮崎作品を全部観てきたが、最新作を観るたびに、そのテーマを考えさせられてきた。
『ポニョ』も多くのメタファー（暗喩）を含む作品で、地球環境問題まで扱っている。
楽しむ側は一々分析する必要はないのだが、それでも宮崎監督の多くのメッセージをさまざまなシーンから読みとることができる。

宮崎監督のオプティミズム（前書き）

「神経症と不安の時代」に
立ち向かうためにこの作品を
作ったという宮崎監督。

アンデルセンの『人魚姫』とは
真逆の構成がそれを物語る。

映画全体にちりばめられた
メタファー（隠喩）を
深読みしてみたい。

宮崎監督のオプティミズム

宮崎作品を全部観てきたが
最新作を観るたびに
そのテーマを考えさせられてきた。

『となりのトトロ』は
わが家のダンゴ三兄弟が小さい頃
いっしょに何十ぺん観たことか・・・。

『ナウシカ』も『ラビュタ』も『紅豚』も
『魔女宅』も『もののけ』も『千と千尋』も
そして『ハウル』も、
子どもたちとビデオで繰り返し観た。

『ポニョ』は作品的には
『トトロ』に近いかもしれない。
もうすでに、子どもたちが主題歌を
口ずさんでいるほどだ。

『トトロ』の「歩こう。歩こう。わたしは元気」
という歌は、すでに全国の
幼稚園、保育園の定番になっている。
久石　譲はあの一曲だけでも
ずいぶんと幼児の情操教育に貢献したので
国民栄誉賞ものである。

さて、映画でまず印象的だったのは
崖の上の宗介の家が

意図してフリーハンドで描いてあり
直線がない。
そしてパステル画のような色彩である。

「うまへた」ふうの絵は
あたかも紙芝居タッチのようでさえある。
かつて邦画全盛期には
テレビは電気紙芝居と揶揄されたが
『ポニョ』はスクリーンに映る紙芝居のようで
背後に宮崎監督が紙芝居屋のおじさんのように
存在するのが感じられた。

劇場は子どもたちがいっぱい入っており
お約束のところで、いっせいに笑っていた。

なんだか、宮崎監督が好々爺然として
紙芝居の向こう側で楽しげに
めくりをしているように思えた。

＊＊＊＊＊＊＊

アンデルセン童話の人魚姫は
王子に一目惚れして人間になるも
最後は結ばれることなく
失恋のなかで泡となって昇天するという
悲劇になっている。

いっぽうポニョは
両親から祝福され
人間界からも受け容れられ

大好きな宗介といつもいられることになる。

（もっとも、人魚姫は１５歳、ポニョは５歳であるが）

人魚姫では、足を得る代償として
魔女から最高の美声を奪われ、しかも
歩くたびにナイフでえぐられるような激痛まで伴う。

ポニョは、自ら手足を魔法力で創出して
しかも声まで獲得する。
そして、主題歌にあるように
「足っていいな　かけちゃお！
　おててはいいな　つないじゃお！」
と歩く喜び、手のある喜びを
謳歌している。

宮崎作品はアンデルセン原作とは
悲劇の要素をすべて真逆に塗り替えた
ようにも見うけられた。

これはアンデルセンの伝記から察するに
幾度も失恋を繰り返し、生涯独身だったことと、
ペシミストで強迫神経症だったきらいがあるので
それが作品に暗い影を投げかけたであろうことは
想像できる。

いっぽうの宮崎は
これまでの作品内容を観ると
一過性の波乱万丈のエピソードはありながら
最終的にはハッピーエンドになる物語創りから

本質的にはオプティミストではないか
と想像できる。

幸せになる片子

鬼と人間の間に生まれた子どもを「片子」という。

『鬼の子小綱』という昔話がある。河合隼雄の『生と死の接点』（岩波書店）から話を要約してみよう。

「ある日、木こり夫婦の妻が鬼に連れ去られ、夫は妻を探しに「鬼ヶ島」へと渡る。そこには妻と鬼の間に生まれた半人半鬼の片子がいる。夫は片子の助けもあって、妻を取り戻して片子と三人で家に無事にもどることができる。

しかし、片子は「鬼子」と呼ばれ誰からも相手にされず、人間の世界になじめなくなって、とうとう木から身を投げて自殺してしまう」

河合は日本における片子の類話について丹念にあたり、悲劇的結末が圧倒的に多いことを述べている。

「親に似ぬ子は鬼っ子」という言葉があるが、子というのは必ず親に似るもので、親に似ない子があれば、それは鬼の子であるという意味である。

片子の悲劇は身近な例では「海外帰国子女」問題がある。幼少から海外で暮らし、アメリカナイズ、あるいはヨーロピアナイズされた子が日本の学校にもどってきて起こる文化的軋轢は想像に難くないだろう。考え方から自己主張の仕方まで日本の子からはＫＹと排除されるのでそれでノイローゼになる子が多くいる。

ユング派の深層心理学者である河合は先の著書で

「現代に生きる日本人としては、片子を自殺に追いやらず、活かしつづけることにより、そこにどのような新しいファンタジーが創造されてくるかを見とどけること、その新しいファンタジーを生きる

ことに努力を傾けることが課題となるであろう」
と述べている。

ポニョは、人間と人魚の間に生まれた片子である。もっともその様相は「鬼っ子」と呼ぶには、あまりに愛らしいが。

宮崎　駿の描いたストーリーは、河合の片子における「現代の課題」に対してのひとつの答えになっているように思える。

ただし、その後のポニョがどう成長したかは、各人のオプティミスティックなファンタジーに期待するほかはないが、さしずめ典型的な展開なら、宗介の家の養女になり、保育園に通いだして、やがて成長のあかつきには、宗介と結婚して、めでたし、めでたし・・・というあたりだろうか。

もうひとひねりすれば、魔法は失ったとはいえ、かなり特異な子のポニョを
学校はどう受けていくか・・・ということになり、なにやら特別支援教育などという言葉も思い浮かぶ。

つまり、強い個性をもった子、「支援を必要としている子（ｃｈｉｌｄｒｅｎ　ｗｉｔｈ　ｓｐｅｃｉａｌ　ｎｅｅｄｓ）」の成長、発達を、本人の主体性を尊重しながらどう見守り、アシストしていくかという今日の教育課題の最前線につながるのである。

人類のパノラマ現象（前書き）

劇中、なぜ古代魚が登場するのか、そのわけを考えてみた。

人類のパノラマ現象

宮崎監督の作品解説には

「少年と少女、愛と責任、海と生命、これ等初源に属するものをためらわずに描いて、神経症と不安の時代に立ち向かおうというものである」

と記している。

たしかに、ここ最近、狂気に満ちた通り魔殺人が頻出しているし、身内間の殺人もあとを絶たない。

物価もまた狂乱、高騰し、食品偽造は日常茶飯事となり、教員まで汚職まみれで・・・、人々の不安を誘う悪事ばかりが目につく。

こういう世相では『崖の上のポニョ』のような「未来は明るいはず」という映画があたかも闇夜の燈台の灯のようにさえ思えてしまう。

宗介の家がなぜ崖の上なのかというと、あたり一面が海で覆われても、そこだけは大地の一部として毅然として存在していられるからではないだろうかと感じられた。

それはまるで、無意識的に歯止めなくどんどん神経症と不安の時代に傾斜して呑み込まれそうになっている現代に

「このままではいけない」

と明確な意識化と自覚化を持つ必要があるとでも言っているかのようである。

今ここで、母親リサのような危険を顧みない正義心と責任感と決断力と行動力をもってことにあたらないと人類は今、後戻りできないような危ういところに立たされているのである。

ショートショートの天才星新一に『午後の恐竜』という作品があ

る。詳しいストーリーは忘れたが、たしか、ある日突然、ビルが立ち並ぶオフィス街に恐竜が出現する。
それは世界各地で起こった現象で、人々は突然の出来事に混乱するが、さる科学者だったかが
「これは、ひょっとすると、人類規模のパノラマ現象かもしれない」
と意味深な解説をする。
それは、自殺を試みて偶然に助かった人がよく証言することで、例えば崖から飛び降りて途中で木に引っかかって助かった人は
「わずか一、二秒の間に、人生を走馬灯のように見た」
というものである。

我われの脳はハードディスクのように誕生から現在までの人生の航跡を漏らすことなく記録しているというのだ。
しかし、ふだんはそれは決して瞬時にして観ることはできないが、人生のあらゆるしがらみから開放される瞬間や、何がしかの修行によってそれは垣間見ることができるというのだ。
天才モーツァルトはイメージのなかで曲を一瞬に感じたという逸話がある。
それを我われが曲として聴くと２０分かかるのである。映画『アマデウス』でも作曲シーンで、あまりに楽想を書きとめる手の動きの遅さに
「待ってくれーッ！」
と自分の脳？　に叫んでいる。
このエピソードなども、なにやらパノラマ現象ともどこかで関連しているかもしれない。

『午後の恐竜』では、よくよく精査されると、地球の生命体の進化の過程が午前中から各地で出現していたらしいとなり、恐竜が突如姿を消して、サルみたいなのが現れたかと思うと、とつぜん眩い閃光で地球の生命体は絶滅する・・・という内容だった気がする。

それが、全面核戦争だったか、隕石衝突だったかは定かではない。
さて、『ポニョ』のなかで、海面上昇した海中で、古代魚が悠々と泳ぐのに不思議な気分を味わった人も多いと思う。
（なんで？　映画だから？　ファンタジーだから？　なんでもあり？）
と言えば、それまでだが・・・。
原因はまったく語られていないが、月がやたら接近してどうやら地球が破滅の淵にありそうだ、ということは示されている。
そのパノラマ現象が古代魚の出現なのだろう。
しかし、崖っぷちのところでポニョが人間になることで危機が回避される。
ここにも何らかの隠喩がありそうだ。
宗介の家が「崖っぷち」にあるのも、『崖の上のポニョ』というのも、人類がまさしく今、地球温暖化という外的自然環境と市場狂乱・人心荒廃という内的自然環境の両破壊で「オン・ザ・エッジ」状態を示唆しているようである。

地球温暖化／個人として生きる／「食べる」という日常性

『地球温暖化』

劇中で、たしか「大洪水」と言っていたように記憶しているが、あの状況は豪雨による河川の洪水ではなく、どう見ても海面上昇といったほうがいいのではないだろうか。大潮にしても、ずいぶんと潮位が上がりすぎである。

もっとも、月が異様に巨大化して描かれていたので、ファンタジーのなかではそれをも上まわる天変地異が生じていたのかもしれないが。月は潮汐力を左右するから潮位変動にはつながる。

しかし現実的に考えると、やはり地球温暖化により北極、南極の氷が解けるとあのように海面上昇して街々が水没すると考えるのが自然かもしれない。

それは実際に太平洋の島々ですでに起きている現象である。

宮崎アニメのメッセージに共通する「自然との共生」というテーマを考えると、ここに地球温暖化という、今、まったなしの大きな環境問題があり、人類が本気でそれと取り組まないと、取り返しのつかないことになるという警鐘を鳴らしているのを感じるのである。

ポニョは人間と人魚から生まれたハイブリットである。そして、それは人間を愛し人間になる決断をし、そして天変地異の危機は回避される。

ここに人間と自然の関係回復というメタファーがあるようにも思われるのである。

『個人として生きる』

物語が始まって、宗介が「リサ」と呼ぶ女性ははたして親なのだろうか、それとも何か特殊な関係なのだろうか、としばらく勘ぐるのに時間が要った。

そして、ようやく親の名前なのだとわかったが、古い年代のせいか慣れるまで若干の違和感があった。

『クレヨンしんちゃん』も、時おり「ミサエ」と親を呼び捨てにしてはいるが、あれはキツイ洒落含みのギャグマンガでもあり、それが彼の小悪魔的なキャラを表現するひとつの小道具になっている。

しかし、宗介の場合はギャグではないので様子が違っていそうである。

すくなくも彼の意思からではなく親がそう呼ばせているきらいがあるからだ。

子どもが父親をも「耕一」と呼ぶこの家庭は未来的、進歩的？家族のひとつのあり方の試論的提示なのだろうか。とすれば、将来、親がかりのニートや引き篭もりというパラサイト息子・娘らとは一線を画すような個人として、幼少期からこの親たちは育てようとしているのかもしれない。

宗介は「ひまわりの家」の婆様たちも「おばあちゃん」とは一括りにせず「トキさん」「ヨシエさん」と個人名でつきあっている。

そして、ポニョに対しては、魚とも、まして人面魚ともなく「ポニョ」として、あくまで個と個でつきあっていこうとする。

人間関係には、機能的関与と全人的関与というふたとおりがある。親と子、介護者と被介護者というのは機能的関与であるが、宗介とリサ、リサとトキというとき、それは立場や役割、身分を超えた、まさしく人と人の全人的な関わりなのである。

この映画で、子どもが親を呼び捨てにするのに違和感を覚えるというのは、我われ日本人が、日常、いかに個として生きていず、みなさまと同じにと個が埋没しているかを思わされる。

母性社会でもある日本の同調圧力の強さは毎年十二万人もの小中

校での不登校を生み、十一万人もの高校中退者を生んでいる。あるいは三万人を超す自殺者もなんらかの関係があるのかもしれない。
宮崎監督は、『ポニョ』という一見、児童向けの物語で、病む現代社会の処方箋として「強烈な個の確立とそのあり方」を示しているのかもしれない。

『「食べる」という日常性』

宮崎映画には、お約束のように食事のシーンがある。印象的なのでは『ハウル』でのマルクルがベーコンエッグをパクつくところ、『ゲド』でのベーグル・サンドを食べるところ、そして『ポニョ』ではハムを食べたり、インスタントラーメンを食べるシーンがある。
物語のなかに意図的に挿入される食事シーンは、どうも劇的な内容におけるひとつの「息継ぎ」のようでもあり、また、交響曲などにおける瞬時のゲネラル・パウゼ（全体休止）のような効果のようでもある。
また、それは人間はどんな劇的な出来事に遭おうとも食事はしなくてはならないし、トイレにも行かなくてはならないし、眠らなくてはならない…という日常性や生き物としての宿命をも描いているかのようである。
「食べる」というのは肉体的なエネルギーの補給なのである。とすれば、「映画を観る」というのは精神的なエネルギーの補給かもしれない。
人生は、この形而上的なものと形而下的ものとのバランスが大事であって、それは車の両輪のようなものなのである。

最近、感心したあるマンガのフレーズに
「食べ物は体をつくりますが、食べ方は心をつくります」
というのがあった。

まったくその通りだと思った。

今の「食育」というひとつのブームは子どもたち、若者たちの「孤食」「個食」の反省点からも出発している。

コンビニ文化が隆盛なのはけっこうだが、まさにコンビニエントに、簡便にひとりで、自室や路上でファーストフードをパクついてばかりいたら、ほんとうにおかしくなって当然である。

「孤食」の問題は、一ケのオニギリが体に１６０キロカロリーの生理的栄養価とはなっても、心理的栄養価は０にしかならないということである。

アキバ事件をはじめ、連日、キレて殺傷事件を起こす青少年があとをたたない。きっと、家族や誰かと、笑顔や言葉やこころを交わして食事をしてこなかったのだろう。

この意味では、バブル前後の家庭での食事事情は、親たちの多忙さや、子どもたちの多忙さによって、崩壊してきたと言わざるをえないだろう。

『ポニョ』では、ただのハムやインスタントラーメンを幸せそうに食べるシーンがある。

何を食べるかが大事なのではない。

誰と食べるかが大事なのである。

大好きな宗介と食事できるポニョも大好きなポニョと食事できる宗介も、そして二人の愛らしい子どもと食事できるリサもそれだけで幸せな時間なのである。

天国や極楽とは、けっして天上界や霊界にあるのではなく、この地上で、日常で、愛するものといっしょに食事をしたり、遊んだりすることの瞬間性にあり、そのときの心の状態にある…と、宮崎監督は我われに伝えたかったのではないだろうか。

関係性の回復／血のイニシェーション／「情」抜きの情報／「歩く」ということ

『関係性の回復』

現代は〈キレてる社会〉ともいえよう。人とあらゆるものとの関係性がキレているからだ。

人と人の関係性がキレていて親子の間で殺人が起こる、夫婦間で、生徒ー教師間で、自分と無縁の他者間で…と、近年起こった事件ばかりだ。

人と自然の関係性もキレている。

九九年に、神奈川県の玄倉川で起きた川の中州でキャンプしていた十三人が突然の増水により死亡した事故がある。

地元の人たちの再三の警告にもかかわらず、自然を舐めていた無謀な都会人たちがパラソル一本にすがって濁流のなかに寄り添って立つ姿が全国に放映された。

そして、次の瞬間、人々は川に呑まれて消えた。

死者に鞭打つようなことは言いたくはないが、当時、生存者もいたので、あえて厳しいことを言えば、生命の危険の判断力を持たない乳幼児をも死に至らしめた大人たちの責任は大きい。

米国なら児童保護違反に問われるだろう。

あのときの教訓が生かされず、神戸の都賀川では鉄砲水により児童ら6人が亡くなった。引率者を責めるのは酷かもしれないが、自然はいつも穏やかで優しいばかりではないのだ。

「自然を守ろう」というのは傲慢な考えで、人間が「自然から守られている」のである。

関係性の話に戻すと…

人と金の関係性がキレて、投機マネーが暴走して、この狂乱物価

になっている。
「先物買い」とかデリバティヴとかサブプライムローンとか…人と金との健全な関係性がおかしくなっている。
人と物質社会との関係性がおかしくなり、その結果の地球温暖化である。
人と体との関係性がおかしくなり、心身症の増加、アレルギーの増加、自殺の増加。
人と霊性との関係性がおかしくなり、オウム事件や怪しげな宗教、霊感商法の跋扈。
オカルト、スピリチュアル、占いのブーム。
まだまだ、様々な関係性切断の病理はある。

『ポニョ』では関係性の回復というテーマが随所に見られるだろう。
親と子、夫と妻、子と子、老人と子ども、人と自然、生と死、自と他…。
人は人面魚とさえツナガれるのだ…と、宮崎監督は言いたかったのではなかろうか。

『血のイニシェーション』

劇中、ポニョは宗介の血を飲んだがために、魚ではいられなくなる、という話になる。
このシーンを見て二つの事件を思い起こした。
一つは、神戸の酒鬼薔薇事件である。
あのとき加害者の少年は首を切断した児童の血を飲んでいる。
それを少年審判で
「あなたはなぜ、血を飲んだのですか？」
と問われ
「僕は、穢れているから…」

と応えている。
純粋な少年の血を体内に取り込むことによるみそぎ禊の儀式だったわけである。

もう一つの事件はオウム真理教の信者たちが麻原の血を高額を出して飲んだという話である。それを彼らは、尊師を体内に取り込む「血のイニェーション（通過儀礼）」と呼んでいた。
ある部族では、神聖な山の生き物である熊の血を飲んで、神と同一化する儀式があるというのを聞いたことがある。
これらのことから、「血を飲む」行為とは多分に宗教性を帯びた儀式であることがわかる。

ポニョが偶然とはいえ、宗介の血を飲んだことは人間になるためのひとつの通過儀礼でもあったのだろう。
また、地上界のハムを食べたことは神話の世界の「よもつへぐい黄泉戸喫」のテーマに似ており、つまりあの世に行って、むこうの食べ物を食べるとこの世には戻れなくなる、という話を連想させた。

日本神話のイザナギ／イザナミの話や、ギリシア神話のペルセポネー／ハーデースの話にそのようなことが出てくる。
ポニョの場合は、ハムは食べる、血は飲む、しかも人間に捕獲される。
これでは人間界に入らねばならないのは必定であろう。
もっとも、彼女の場合は宗介に惚れ込み、自ら望んで人間になるのだから、先の二つの神話のような別離を伴う悲愴感はない。
ここにおいても、宮崎監督は徹底してオプティミズムを貫いていると思わされる。

『「情」抜きの情報』

河合隼雄の本に、五木寛之の言葉として
「現代は『情』抜きの情報になっているから困る」
というのがあった。
作家らしい面白い表現だなと思った。

『ポニョ』のなかで、船上の父親／夫と、崖の上の自宅の息子／妻が信号で交信するシーンがある。
時代設定がまだケータイ普及まえなのか、なんともややこしい前時代的なことをやっているなぁ…と思いつつも、そこに交わされる情の深さに憧れと羨望を感じた。
殊にリサの
「ばか。ばか。ばか…」
という女心には、グッときた。
あれが、ケータイのメールだったら、どれほどつまらないか。
相手の姿がたとえ離れていて見えなくも、その存在をそこに強烈に感じてこそ、メッセージには心がこもるのだろう。
中高生から大人まで、なかば暇つぶしとしか思えないメール交換に人生の貴重な時間を空費しているのは、こころのエコロジー的に如何なものだろうか。

『「歩く」ということ』

物語のおしまいのほうで、デイケア・センターの老人たちが、それまで車椅子に座って日がな一日茫然と海を見ながら暮らしていたのが、健脚を取り戻し、みんな子どものように嬉々として走り回るシーンがある。
これはいったい何を意味しているのだろうか、と考えた。
「歩けるっていいね」

と主題歌にもあるように、ポニョが足を獲得して喜ぶ過程とシンクロしているのである。
「歩きたい」と強く思うことによって、ポニョは自ら足を作り出した。

念じる、祈る、信じる…という行為は、私たちの願いを実現するひとつの方法なのかもしれない。

老人たちに起こった身の奇跡は、人面魚が上がって、天変地異が起こり、この世の終わりかと思わせるただならぬ出来事に、老人たちの「火事場の馬鹿力」が働いて歩けるようになったとも解釈できないでもない。
しかし、ポニョとの関連性からみれば、むしろ、自らの意思で歩こうとせず、漫然と介護される人になりきって、なかば心身の不使用・不活発よって廃用症候群という機能低下を起こしていたのではないかとも推察できる。
「こころ」も「からだ」も使わなければ使えなくなっていき、「動かないから動けない。動けないから動かない」という悪循環に陥ってしまうのだ。
宇宙飛行士などが宇宙ステーションに長期滞在するときは、重力の影響によって成長発達する筋骨の機能低下を防止するのに、せっせと筋力トレーニングしなければならないのである。

「老いは足から」とも言う。
「人生の一歩」という比喩もある。

「歩く」という行為は、進化的に見れば、魚類のヒレが足に変化し、両生類となって上陸し、やがて爬虫類、原始哺乳類を経て、人類が二足歩行をして獲得したものだ。
劇中、古代生物が海中に描写されるのも意味深長で、それはちょ

うど「進化」というキーワードを背景に提示しておいてポニョが魚から人間に、老人が車椅子から自足歩行に、と変容（進化）したさまを浮き立たせる構図になっているように見えた。

思えば、『となりのトトロ』の主題歌にも

「歩こう。歩こう。わたしは元気」

という一節があった。

どうも宮崎監督は無意識的に「歩く」という、もっとも人間的な行為に「独立独歩・自立」という精神的なあり方まで含めようとしているのではないか、と思われた。

母なるもの／老人と子ども／「ゆらぎ」から生じるもの／みんなちがって、みん

『母なるもの』

この映画全般を俯瞰すると、男性の存在感が薄いというか、それを凌駕する女性の「母なるもの」の存在感と力が大きいことを感じさせられた。

不思議なドームのなかでリサとグランマンマーレが、なにやら密談のごときをしているシーンは

ポニョと宗介の今後についてのふたりの母親の相談なのだろうが、あたかも洞爺湖サミット以上の

地球・人類の存亡について語り合っているようにも見えた。

事実、ポニョの人間化で危機は回避されるのだから、まんざら当たらずといえど雖も遠からずであろう。

女性は「産みの母」である。それは「海の母」「母なる海」という語感ともどこか通ずるものがある。

グランマンマーレというのがイタリア語なのか何語かは知らないが、グランドマザーの「祖母」というよりもグレートマザーの「太母」に近いのではないかと思った。グレートマザーというと、土偶や塑像に見られるのは地母神（大地の母）というイメージが強いが「海母神」（海の母）というのがあってもいいように思う。「母なる大地」があれば「母なる海」もあっていいだろう。

そうすると、リサとポニョママの巨頭会談は、まさに地球・人類を救うために地母神（大地の母）と海母神（海の母）との談合だったと想像すると面白いのではなかろうか。

しかも、どちらも女性で、宗介やポニョをこの世に産み出した母親、彼・彼女にとっては創世の女神である。

これら、産み出す母たちのまわりで、ただドタバタしている耕一やフジモトたちの父親たちの姿はどうだろう。

免疫学者の多田富雄がいみじくも言ったように、産み出す女性はたしかな存在感があるが、男性は単なる現象にすぎない、という言葉そのままのようである。

『老人と子ども』

『ポニョ』製作の宮崎監督の追跡ドキュメントがＮＨＫで放映された。

四人兄弟の次男で、内気な駿少年は、病身の母にオンブを拒まれたのがトラウマとなり、以後、自らの甘えを絶って「いい子」を演じ続けていたが、しだいに

「生まれてこなきゃよかった…」

とまで思うようになったという。

そして、その母親の原イメージは、『ラピュタ』のドーラや『ポニョ』のトキに投影されていたという。シャイの裏返しで、どこか男勝りで気丈なキャラクターたちである。

生涯病身でそんな固く心の閉じた母。すでに病没して、直接言葉を交わすことの出来なくなった母と自分との「たましい」での和解をどう描くかというので監督は煩悶し、ようやく宗介をトキの胸にシッカと抱きとめるということで解決させた…。

そのプロセスをドキュメントが克明に描いていた。

宮崎駿は、

「死んだら、母に会えるんだ」

という本音もポロリと漏らしていた。

宮崎作品には、なるほど老人が多く登場する。『ハウル』では主人公のソフィー自身が「老」を体験する。（これについては『ハウル』の深層分析で詳述した）

老人は、もうすぐ「あちらの世界」へゆく存在であり、子どもは、

「あちらの世界」から来たばかりの存在である。どちらも「あちらの世界」に近い存在という共通性がある。
そして、どちらも人生への視点が低く、大所高所ではなく小所低所からものごとが見えている。
壮年期の人間は、生きること、働くことに懸命で、とかく、人生の大事なもの、「たましい」にとって大切な何かを見落としがちになる。
宮崎監督は、5歳の子どもの視点で『ポニョ』を描いたという。
その目には、波は水のかたまりではなく、まるで生き物のように襲ってくるし、緑のバケツはただの入れ物ではなく、ポニョと自分をつなぐ燈台の役目を果たし、歩けぬ老人は無用の人たちではなく、たおやかな心と「たましい」をもった人間として映るのであろう。

『「ゆらぎ」から生じるもの』

頑迷固陋な老人トキが、宗介からポニョを見せられるや
「人面魚があがると、津波がくる…」
と恐れ慄く。
そして、ほんとうに津波様の大水害になる。
トキのなかでは迷信が現実化するのだ。彼女はデイケアセンターの老人たちとは別行動で東屋に避難する。
トキに行動をせしめた迷信には
「調和が乱れると、悪いことが起こる」
という因果律がある。
しかし物語では、巨視的に見ると、地球・人類の危機が回避されるので、あえて、「ゆらぎ」が起こることが必要だったということを伺わせる。ここから、なにやら「パラダイム・シフト」などという言葉も思い浮かぶ。
地球・人類は、温暖化問題では「待ったなし」のタイム・リミッ

トに来ていそうである。なのに、未だに世界規模で足並みの統一した解決策が講じられていない。
各地で小規模のテロや自然災害などの「調和の乱れ」はあるものの、地球・人類の危機が回避されるほどの「ゆらぎ」はいまだに起こっていない。
ビッグバン説でも宇宙は物質密度の「ゆらぎ」から生じたと考えられている。
アメリカに黒人大統領が誕生したり、発展途上国の中国でオリンピックが開催されたり、日本に政権交代が起こってきたり、現代史に、微小ながらも「ゆらぎ」が生じてきていると見てもいいのだろうか。

『みんなちがって、みんないい』

かつて、タリバンが、バーミヤンの石仏を砲撃で破壊した映像が世界中に配信された。
そして、兵士が
「アラーは偉大なり」
と唱えた。
世界的遺産ともいえる巨大石仏は、一発の砲弾で粉々に砕け散った。それは哀しい光景であり、あわれな人の姿でもあった。
思想・信条・宗教・民族・風俗の違いが、今日の世界のきな臭い状況を生んでいる。
なぜ人類は、五本の指のように、みんな違っているからこそ役に立つ、という簡単明瞭な原理にいつまでも気づかないのであろうか。
五本の指がみな同じだったら物をつかむことが出来なくなるだろう。

金子みすゞの詩に

「みんなちがって、みんないい」
という一節がある。
人間はだれもがオンリーワンの世界にただひとりの存在なのである。
老若男女みなちがう。そして、違っていながら、それぞれに連続性と共通性がある。
男女の違いにしても、見た目は異なるが、体のつくりは全く同じで、わずかに染色体の1本だけが異なるにすぎない。
チンパンジーと人間の遺伝子はほぼ同一に近い。
かように共通性・連続性があるにもかかわらず、同じ人間どうしが文化やイデオロギーの違いで殺戮しあい、破壊しあっている。

『ポニョ』という作品からは、「連続性」というテーマが思い浮かぶと同時に、あまり使われない対立概念の「切断性」という造語が脳裏に浮かぶ。
現代の世界的な病理は、この「切断性」によるものなのである。
あらゆる関係性が「キレている」ことが、すべての病根なのである。

グローバリゼーションといいながら、価値を自分たちに都合よく一元化しようとする大国の戦略・魂胆にも注意を払わねばならない。
今日、洋服を着て、自動車に乗り、エネルギーを諸費し、ビルで働く…という、西洋風ライフスタイルが世界中を席捲した。
ひとつのグローバル・スタンダードは、文明レベルでは達成しつつあるのだ。
インターネットの普及もそのひとつだろう。

『ポニョ』のなかにも、いかにも日本的というシーンは見あたらない。
しかし、宮崎監督があえてＣＧを避けて、手書きで作品を仕上げ

たというところに、日本の誇る手仕事の見事さ、職人技にこもる和の魂を見た思いがした。

「和魂洋才」という言葉が思い浮かぶが、日本アニメの水準の高さは、世界を席捲したことでもわかる。

『ポニョ』のなかには宮崎監督の「人間愛」「自然への畏敬の念」「個性尊重」「ツナガルことの大切さ」というメッセージが重層的、多義的に織り込まれている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8063f/

『崖の上のポニョ』深層分析

2010年10月10日01時37分発行